私立　名古屋学院大学

●プログラムの名称：自分発見型学生支援ネットの構築に向けて
　　──「キャリアデザイン」をプラットフォームとした新たな展開
●プログラム担当者：商学部教授・キャリアセンター長　三井　哲
●キーワード
　１．キャリア形成支援　２．コミュニケーション支援　３．自分発見
　４．ケア重視　５．将来志向

１．大学の概要

名古屋学院大学は、1887（明治20）年創立の愛知英語学校を母体に、1964（昭和39）年、経済学部経済学科の単科大学として開学した。キリスト教主義に基づく「敬神愛人」を建学の精神とし、広く経済社会において貢献できる人格と能力を備えた人材の育成を社会的使命としてきた。

現在、経済学部、商学部、外国語学部、人間健康学部の４学部９学科と、経済経営研究科、外国語学研究科の２研究科６専攻を擁する総合大学（総収容定員4,963名）に発展し、中部圏の地域社会や産業界に多大な貢献を行っている。

「敬神愛人」は、愛知英語学校を創設したアメリカ人宣教師フレデリック・C・クライン博士によって掲げられ、名古屋学院大学に継承されてきた。『マルコによる福音書12章29節～31節』から生まれた「神を敬い、他者を愛し、自らを尊ぶ」という精神は、120年以上たった今日でも本学に集う学生と教職員の中に脈々と受け継がれ、育まれている。

そして、こうした人格の育成を根幹とする建学の精神は、教育課程はもちろんのこと、大学運営や教育活動の多方面に生かされ、「学生支援」の根底に息づいている。

２．本プログラムの概要

本学がここ数年重視してきたキャリア形成支援から見ると、今の大学では、将来に明確な意識を持つ早熟な（意欲のある）学生とそうでない未成熟な（意欲の弱い）学生の間の“二極化”が進んでいることが、学生のニーズに応じたより効果的な「学生支援」を提供する上で大きな課題となっている。

そこで、本学は、実績のある「キャリアデザイン」と全学的なコミュニケーション支援システムを駆使することで「自分発見」する多様な学生のためのプラットフォームをつくり、学生が自分を知り、自分の将来に向けた課題に向き合おうとする場と機会に必要な支援やケアを提供する「自分発見型学生支援ネット」の構築を目指す。

その一方、現代の学生をこうした自分発見に導くには「ケア重視」の支援が必要であり、本学のよき伝統を生かしながら学生サポートの充実を図る。

こうしたプログラムによって、本学は、移行期の若者を高い人間力と明確な将来志向をもった人材に育成するという社会的要請に応えたいと考えている。

３．本プログラムの趣旨・目的

（１）問題の背景と新たな方向性

本学は、1998（平成10）年1月に、数年にわたる全学的な議論の集大成として『名古屋学院大学における教学の将来構想』をまとめた。そこでは、社会的要請と学生のニーズに応じた大学のあり方、その根幹をなす教学の基本方針と教育の基本理念として、①入学する学生の可能性を開く教学体制の確立、②学生に学ぶ喜びを理解させる教学内容の構成、③多様な学生を受け入れることのできる教学体制の形成、④「基礎的専門教育」に重点をおいたカリキュラムの編成、⑤社会に貢献し、社会を生き抜くことのできる学生の育成、⑥学生に自覚と責任を求めることのできる教学体制の確立、という６つの基本方針が提示された。

これは、「大学に入学してから卒業するまでの学生の修学生活をその人格的成長と将来を見据えて全面的に支援する」という姿勢でもあり、ここには、まさに建学の精神を具現化した「学生支援」の基本理念が現れている。

今後も、大学として新たな社会的ニーズや学生のニーズに応えつつ、こうした姿勢で多様な学生に対して効果的な学生支援を展開していかなければならないが、

本学で実績のあるキャリア形成支援やエンロール・マネジメントの視点からみると、多様な学生のなかでも自分の将来や進路に明確な意識をもつ「早熟な」学生とそうでない「未成熟な」学生の間の「二極化」がこれまで以上に進んでいることが大きな課題となっている。この点は、キャリア形成支援に限らず、「意欲のある学生」と「そうでない学生」、「何にでも積極的な学生」と「そうでない学生」といった二層化・三層化も生み出し、修学支援や学生生活支援などのあらゆる面で対応の難しさを現出させている。

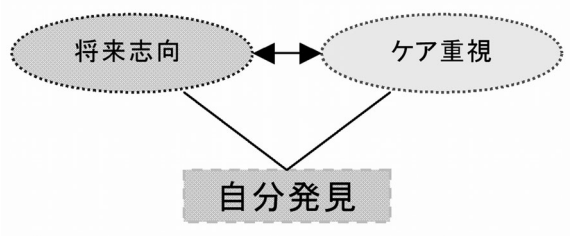
以上のことから、「学生支援」の新たな方向性を見出すことができる。①１年次の段階からキャリア形成支援を通して多様な将来志向を持つ学生に応じた学生支援のネットワークを構築する必要がある。②多様で、かつ二極化した学生に対して「学生支援」を展開する上で、「早熟な」学生にはその将来志向をしっかり根付かせるように、「未成熟な」学生には早い段階から個別ケアを重視した配慮が求められる。③学生の意欲や現代の若者気質に着目すると、その自主性だけに依存した従来の“メニュー提示・サービス提供型”ではさほどの効果が期待できない一方、キャリア形成支援などでは“指導型”の手法に一定の限界があることも確かである。

こうした課題と現代学生の特質に適した、新たなスタイルの学生支援が求められる。そして、これらの方向性を集約したものが、「自分発見型」学生支援の構想である。

（２）「自分発見型」学生支援とは何か

「自分発見」（あるいは自己発見）は、近年、キャリアカウンセリングの分野でよく用いられる用語であるが、ここではそれを「学生が自分を理解し、自分の将来を見定めて自分の課題を克服しようとする自分を発見する」ことと捉えたい。

この「自分発見」は、ただ「自分は自分は」という自分探しではない。それは、換言すれば「社会や自分を取り巻くものをしっかりと見つめ、自分を知る」ことである。また、現代の学生をこうした自分発見に導くには、「将来志向」だけではなく「ケア重視」の支援が不可欠であり、これらの両輪を軸に早い段階から時間をかけて多様なチャネルと多くのプロセスを経過する継続的で包括的な学生支援が展開されなければならない。人間存在としての学生が発見する自分には、強い自分もあれば弱い自分もあり、この自分発見は、現代における移行期の若者が自立した職業生活の形成へ



と成長する上で重要なプロセスであり、場である。

本学の新たな取組は、こうした「自分発見」を基本に「キャリアデザイン」を用いて有機的に連携した全学的な学生支援ネットワークを構築しようとするものである。そのコンセプトは、以下の図１と３つの要点にまとめることができる。

①「未成熟な」学生はもちろん「早熟な」学生にしても入学時に十分な自分発見ができているわけではない。そのため、二極化した双方に対して早い段階で自分発見の場や機会を設けることが、その後の学生支援を展開する上で重要な意味をもっている。「キャリアデザイン」は本来キャリア形成・就職支援のためのものであるが、こうした視点から１・２年次の学生支援のプラットフォームとして活用する。

②多様な学生にそれぞれの「自分発見」のステージで効果的な支援を展開していくためには、全学的なネットワークのなかで必要に応じた多様なメニューを用意しておく必要がある。また、こうした自分発見を通して多様な学生の人間的な成長を促すためには、必ず「将来志向」の能力開発的な支援と「ケア重視」の「セーフティネット的な支援の両方を備えた支援プログラムを用意する必要がある。

③そのためには、これまで以上に大学全体が現代学生の存在性と向き合い、相互で有機的に連携し、かつ学生との恒常的で双方向的なコミュニケーションができる環境を整備・支援することが不可欠である。

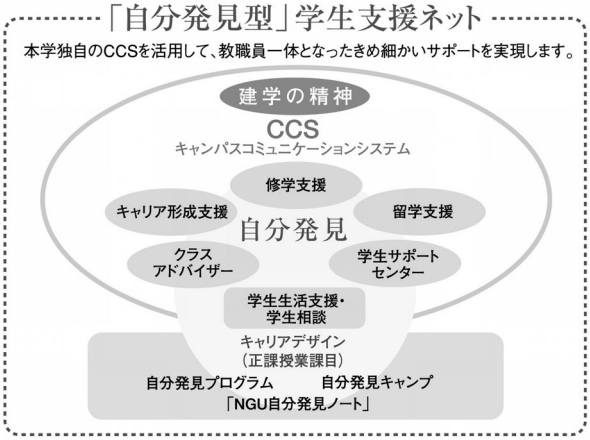


図１「自分発見型」学生支援ネット

これによって“メニュー提示・サービス提供型”や“指導型”と異なり、「学生が自分を理解し、自分の将来を見定めて自分の課題を克服しようとする自分を発見する」機会に必要とする支援やケアを提供する「自分発見型」学生支援のネットワークを構築することができる。

４．本プログラムの独自性（工夫されている内容）

（１）本学における「学生支援」の特色と現状

本プログラムの新たな取組は、本学がこれまで築いてきた学生支援ネットワークを基に、さらにそれを発展させようとするものであり、その独自性も現在の取組が基本になっている。

本学の「学生支援」が持つ最大の特色は、以下の図２のように、学生部以外の教学部門が果たす役割が大きく、学生部を中心に教務部と各センターが有機的に連携し、一体となった学生支援ネットワークが形成されているという点である。

本プログラムも、本学が開発してきたキャンパスコミュニケーションシステム（CCS）によって連携化された「学生支援」ネットを、本学がここ数年間重視してきた「キャリアデザイン」（キャリアセンターの運営）をプラットフォームとして拡充・強化しようとするものである。

本プログラムの核となる「キャリアセンター」は、2001（平成13）年度に就職部からの改組で設置されたものであり、３・４年次生に対する就職支援に限らず、１・２年次生に対するキャリア形成支援（インターンシップや資格講座・就職対策講座など）を行ってきた。

この実績から2006（平成18）年度より学部教育課程の正規授業科目として配置されたのが、新たな取組のプラットフォームとなる「キャリアデザイン」である。

これは、経済・商・外国語学部の全学生対象の履修指定科目であり、１年次から３年次までの６セメスターにわたり「キャリアデザイン１a・１b」、「キャリアデザイン２a・２b」及び「キャリアデザイン３a・３b」が開講され、段階的にキャリア形成に向けた意識を涵養し、具体的な就職対策の基本までを行う計画である。

また、この「キャリアデザイン」での学修を軸にクラスアドバイザーとキャリアセンターが相互に連携することで学生一人ひとりに合ったきめ細かいキャリア形成支援ができるよう努めている。

学内で学生・教員・事務局をつなぐ「キャンパスコミュニケーションシステム（CCS）」（「学術情報センター」の運営管理）は、2002（平成14）年度に、情報リテラシー強化の一環として学生・教員・職員間での対面教育・対面指導に加えてネットワークを活用した教育・学習支援を行うことで教育の質向上を目指すために導入された（図３を参照）。その後のシステム開発や改良により、このCCSは、表１にあるように今では教育支援のみならず学生・教員・職員のあいだのコミュニケーション支援を通して学生支援の様々な面で大きな役割を果たしている。このコミュニケーション支援には、①科目担当教員との連絡機能、②問い合わせ・相談機能、③コミュニティ機能などがあり、学生のポータルサイトや学生所有の携帯電話を通じて学生との情報交換や情報共有ができ、それを基に円滑なコミュニケーションがとれるようになっている。他方、学生支援がこうしたコミュニケーションに依存しすぎないよう留意しており、CCSの導入によって学生への連絡や学生情報処理の業務が軽減された部分を窓口対応や個別対応の場面に振り替えることで、よりきめ細かい学生支援に努めている。

全学部で全学年に設けられた「クラスアドバイザー制」（教務部）は、本学における学生支援の中核に位置づけられており、演習やオフィスアワー、その他の場や機会での担当教員との直接的なふれあいは、学生が

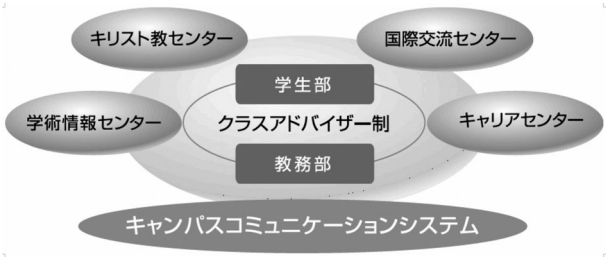


図２　名古屋学院大学〈学生支援〉ネットワーク

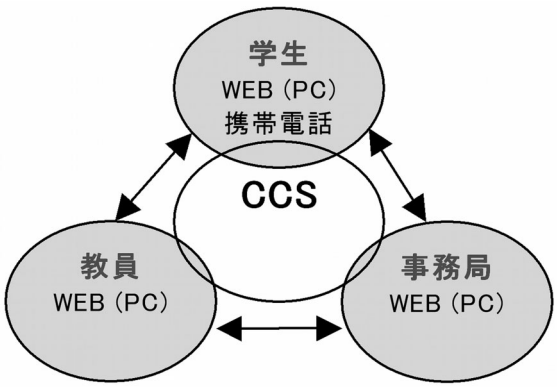


図３　CCSの基本構成

表１　CCSの基本機能

【ノートPC（全学生に無償配布）】
①スケジュール（大学行事/時間割/休講・補講・教室変更連絡/呼出・連絡・掲示板）
②教育支援（シラバス/学習範囲確認/科目情報/課題情報/教材ダウンロード/レポート）
③自学自習（答案提出・自動採点/ランキング確認）
④個人情報（成績情報/健康診断記録/就職活動記録）
⑤コミュニティ（コミュニティの開設・参加・閲覧）
⑥各種相談窓口（履修・生活・健康・就職の悩み/担当教員へのメール）
⑦図書館資料検索、貸出状況・予約状況確認
【携帯電話】
①呼出・連絡・掲示板　②時間割　③休講・補講・教室変更連絡
④自学自習　⑤スクールバス時刻表　⑥図書館情報

修学生活を送る上での“寄る辺”となっている。また、開学当初から重点的に取り組んできた海外留学（短期留学・中期留学・長期留学の各制度）では、「国際交流センター」によって積極的で、きめ細かい留学支援が展開されている。

さらに、本学の特色ある学生相談支援にキリスト教センターが運営する「学生サポートセンター」がある。

これは、牧師資格を持つ職員による学生相談や各種の行事、あるいはセンターを訪れた学生同士のふれあいによって学生の霊性面（スピリチュアル）の成長に向けての支援やケアを行うものであり、通常の学生相談室に対する補完的な役割を担うかたちで学生支援に建学の精神の香りを漂わせている。

（２）新たな取組の具体的内容とその独自性

本学が構想する「自分発見型学生支援ネット」は、これまでに見てきたように①「キャリアデザイン」という早期のキャリア形成支援をプラットフォームとし、建学の精神と独自に開発したCCSを基礎に「学生支援」の全学的ネットワークを構成する、②「将来志向」と「ケア重視」という両面を兼ね備えた自分発見を基本とする、③そうして「自分発見型」という学生支援の新たなスタイルの創造を目指す、という３つの点でユニークな取組であり、かつ先駆けとして他大学のモデルになりうる試みである。

この新たな取組を構成する事業の具体的内容とその独自性は以下のとおりである（図１も参照）。

(i)「キャリアデザイン」の拡充

「キャリアデザイン」は、本学のキャリア形成支援システムにおいて早期の段階（主に１・２年次生）で重要な位置にあり、かつこの新たな取組ではそれを「自分発見」の主要な場や機会、あるいはプラットフォームにするためにその拡充を図る。

①「NGU自分発見ノート」の開発と活用

これは、名古屋学院大学（NGU）で自分発見する学生がそのプロセスと内容を確認でき、クラスアドバイザーとの面談やキャリアセンターでの進路相談などの場面で活用するものである。

１・２年次の「キャリアデザイン」や基礎演習の副教材（紙媒体）として使用して作成した後、３・４年次で就職支援を受ける段階まで活用できるように設計する予定である。これは、「キャリアデザイン」のコンセプトと「自分発見型」学生支援ネットの構想に沿った本学独自のものを開発し全学的に活用したい。

②「自分発見プログラム」

このプログラムは、「キャリアデザイン」の授業を契機に将来志向で自分発見したいと考える学生に提供するものである。学生の将来志向と能力をよく見極めながら、より高い自己実現を求めるクラスと自己理解・職業理解・コミュニケーション能力で自分を高めようとするクラスに分けて開講する点が大きな特色である。2007（平成19）年度は、「体験！仲間づくりのコミュニケーション」・「自分をよく知る」・「私のキャリア・プランニング」・「基礎学力ブラッシュアップ」の各種講座が開講される予定である。

③「自分発見キャンプ」

これは、「キャリアデザイン」についてこられない学生とそれでは満足できない学生に対して１年次の夏休み直前に合宿形式で行う追加授業である。入学後１セメスターが終了するできるだけ早い段階に集中的な時間のなかで密度の濃い特別なプログラムを提供することで、自分発見の大きなチャンスになればと考えている。

(ii) キャリアデザイン・カルテ（CCSで）

本学のCCSに、学生の自分発見につながるようなキャリア形成支援に関連したページを追加し「キャリアデザイン」の授業や「NGU自分発見ノート」の作成を通じて記入させ、それを“キャリアデザイン・カルテ”（CDK）として学生・教員・職員のあいだで共有する。

そうすることで「キャリアデザイン」を本学の「学生支援」ネットのプラットフォームとして活用できるようになるとともに、CCSもこれまで以上に学生の自分発見のためのコミュニケーション支援としての役割を強化することができる。

このCDKには、基本機能として自分発見ノートの作成プロセスで学生が考えてきたキャリア形成の基本項目を入力して表示し、それに教員や職員がコメントしたり、達成度をグラフで表示できるようにするほか、拡張機能（課題やアンケートの提示・集計）、検索機能、コミュニケーション機能、My本棚機能などを搭載する予定である。

(iii) 連動するその他のプログラム

以上のように、「キャリアデザイン」をプラットフォームとし、CCSの情報共有とコミュニケーション支援を基盤に「自分発見型」学生支援を構築するためには、前述した図２のような学生支援ネットワークにおいて他のセンターの新たなプログラムとも連動しなければならない。

①学生サポートセンターの新たな展開

自分の「居場所」を発見できない学生や弱い自分を発見して戸惑う学生が集いやすい場所の整備と場づくりが必要である。そこで、これまでの活動を強化しつつ、スピリチュアル・ケアの専門家による学生ワークショップや教職員研修会を開催したり、そうしたなかから自分を発見し積極的な活動（ボランティア・地域活動など）を行おうとする学生を支援する。

②自分発見・海外インターンシップ

本学の特色である留学支援をベースに、自分発見とキャリア形成の機会を海外にも広げようとするものであり、学業成績がよく、意欲の高い学生を選抜して英語圏と中国語圏のインターンシップに派遣する計画である。

③FD・SDによる学生支援能力の向上

これまで以上に全学的なネットワークとして展開するためには、教職員が、単なる修学指導・学生指導やキャリアアドバイスにとどまらず「将来志向」と「ケア重視」の視点から学生を支援できる意識と能力を高めなければならない。講習・研修会・講演会を通して、新たにそうしたFD・SD活動を展開する。

５．本プログラムの有効性（効果）

以上のような「自分発見型学生支援ネット」は、本学の「学生支援」において様々な効果をもたらすと考えられるが、なかでも期待される主要な効果は以下の４つである。

①直接的で最も大きな効果は、早期キャリア形成支援の向上である。また、これが、修学支援・学生生活支援・留学支援などにも波及し、かつ「未成熟な」学生や「意欲の乏しい学生」を引き寄せ、キャンパス内で多様な学生がそれぞれの将来志向と能力に応じて意欲のある活動を積極的に展開するようになるという効果が期待できる。

②その一方で、自分のキャリア設計に戸惑う学生や悩みを抱える学生が見捨てられてはならない。むしろ、従来の学生相談やカウンセリングに加えて補完的なスピリチュアル・ケアが定着することで、これまで以上に個別のケアを重視した学生支援のセーフティネットが形成されることが期待できる。

③本学が開発してきたCCSをキャリア形成支援の面で強化することで、いよいよ全学的な「学生支援」のためのコミュニケーション支援ネットの構築に向けてさらに前進することができ、全国大学のモデルとなりうる。

④「学生が自分を発見する機会に必要とする支援やケアを」という「自分発見型」で、学生ニーズに応じてより効果的な学生支援が提供できるようになり、また上記１・２の効果により、ニート・フリーター予備軍になる退学離籍者や留年者を可能なかぎり減少させるという、本学に与えられた社会的要請に応えることができる。

６．本プログラムの改善・評価

この新たな取組に対する点検評価は、基本的には、すでに本学に定着した規程と制度に従い、「全学点検評価委員会」の下に置かれた「キャリアセンター点検評価委員会」で行う予定である。ただし、この事業は全学的な連携で行われるため、各学部及び教務部・学生部・キリスト教センター・学術情報センター・国際交流センターの事業内容に関わっている点については、関連する部門点検評価委員会で点検評価を行い、キャリアセンターの分と合わせて全学点検評価委員会において「学生支援」という項目で総括的な点検評価を行う予定である。

主な評価の視点は以下の５つである。

①拡充した「キャリアデザイン」によって学生の自分発見・キャリア志向がどこまで進んだか（１年次・２年次の適性検査の結果や日常のヒアリングをもとに評価する）、②自分発見プログラム・キャンプや連動するその他の事業が効果的であったかどうか（参加した学生に対するアンケート・ヒアリング調査のもとに評価する）、③「学生支援」ネットとして各部門の連携が十分に確保できているかどうか（各部門の自己点検評価の結果を踏まえて全学的視点で評価する）、④特に「学生支援」の質的効果にも留意して評価する、⑤将来的には離籍退学者数・留年者数・就職決定者数の推移にも着目する。とりわけ①～③については、各年度はもちろん学期ごと、事業ごとに評価を行い、プログラムや事業内容について継続的な改善を進める。

７．本プログラムの実施計画・将来性

この新たな取組の実施にあたっては、キャリアセンター長が担当責任者となり、センター運営委員会のなかに「学生支援GP推進委員会」（「キャリアデザイン」担当者２名を含む）を設置する。この委員会は、GP事業全体の進行管理を行うとともにキャリアセンターに関わる新事業を推進する。

また、本プログラムは、学生組織横断的な要素を持っているため、それとは別に関係部署の課長を主なメンバーとする「学生支援GP実務担当者会議」を設置し、GP推進に向けた学内連携の促進や各種事業の調整・実施に当たる。

各年度の実施計画は以下のとおりである。

学生支援ＧＰ事業計画 in 名古屋学院大学

〈2007（平成19）年度〉

・キックオフのための学内説明会と学内啓発
・自分発見ノートの開発とCDK構成の確認
・CCSにおけるCDKシステム開発
・学生サポートセンターの整備と新事業の実施
・自分発見プログラムの試行及び開発
・FD・SD講演会の開催とパンフレット・HPの作成

〈2008（平成20）年度〉

・自分発見ノートの活用開始とCDKの運用開始
・自分発見プログラムの開講
・自分発見キャンプの実施
・自分発見・海外インターンシップの実施
・学生サポートセンターの事業展開
・FD・SD講演会と研修会の開催
・１年生適性検査の実施と結果分析

〈2009（平成21）年度〉

・CDKのバージョンアップ
・自分発見プログラム
・自分発見キャンプ
・海外インターンシップ
・学生サポートセンター
・FD・SD講演会と研修会の開催
・１・２年生適性検査の実施と結果分析

〈2010（平成22）年度〉

・CDKのバージョンアップ
・自分発見プログラム
・自分発見キャンプ
・海外インターンシップ・学生サポートセンター
・FD・SD講演会と研修会の開催
・１・２年生適性検査の実施と結果分析
・３年生に対する学生支援アンケート調査の実施
・「学生支援」に関する将来計画の策定

そして、毎年度行う点検評価の結果、最終年度に実施する３年生へのアンケート調査の結果及びCCSとCDKを利用した学生ニーズの把握をもとに、キャリアセンター運営委員会を中心とした全学的な評価・検討委員会でこの事業に関する最終的な総合評価を行い、その上で次のステップに向けた「学生支援」の将来計画を策定する予定である。

選定理由

名古屋学院大学においては、学生支援に対して明確な理念と目標を持ち、キャンパスコミュニケーションシステム（CCS）の導入やキリスト教センターを介した学生サポートを通して、学生支援を積極的に展開しており、十分な成果を上げていると言えます。

今回申請のあった「自分発見型学生支援ネットの構築に向けて」の取組は、これまでの取組の上に、早熟な学生に対する支援も視野に入れ、ケアという視点も組み込んで自分発見をサポートする、すべての学生を対象とした大学全体の取組として評価できます。また、この取組は基本的にはキャリア支援ですが、動機や背景は明確で、趣旨・目的は十分意義があり、他に見られない工夫ある取組であると言えます。

特に、「早熟」「未成熟」と二極化した学生を対象として多層的に行おうとしている点において新規性があり、これを支える組織体制やCCSの上に有効に機能することが期待され、他の大学等の参考となる優れた取組であると言えます。